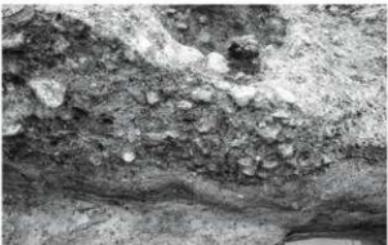




1. 1号溝掘方南壁土層断面西から 5 (北から)



2. 1号溝掘方南壁土層断面西から 6 (北から)



3. 1号溝掘方南壁土層断面西から 7 (北から)



4. 井戸完掘 (南から)



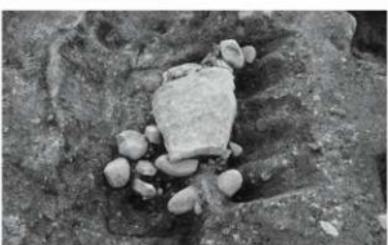
5. 井戸土層断面 (南から)



6. ピット 14 検出 (東から)



7. ピット 16 検出 (東から)



8. ピット 19 検出 (南から)

図39 武家屋敷地区第18地点調査状況 4

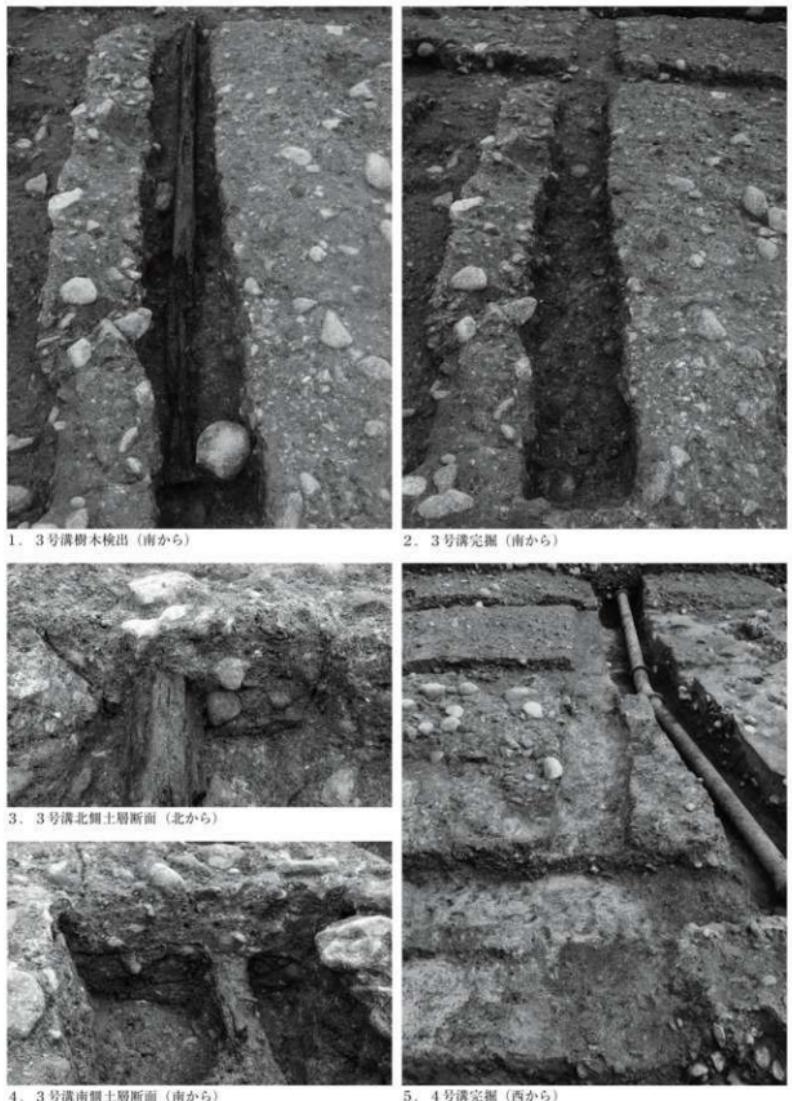


図40 武家屋敷地区第18地点調査状況 5

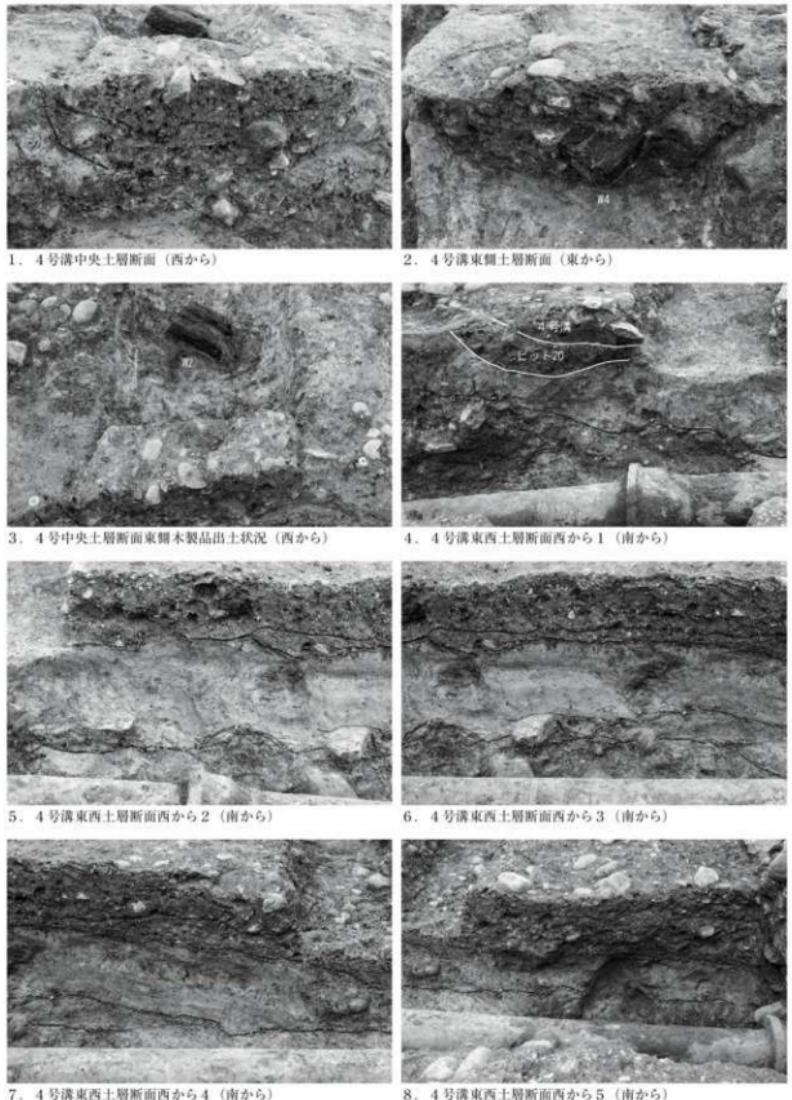
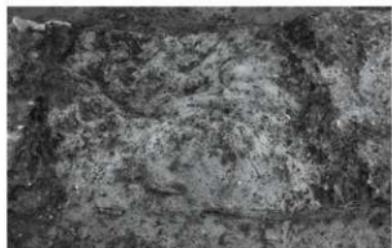


図41 武家屋敷地区第18地点調査状況6



1. 5号溝完掘（東から）



2. 4号溝・5号溝土層断面（西から）



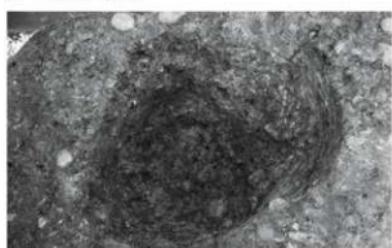
3. 1号柱列（上が北）



4. 1号柱列柱1柱？検出（南から）



5. 1号柱列柱1土層断面（南から）

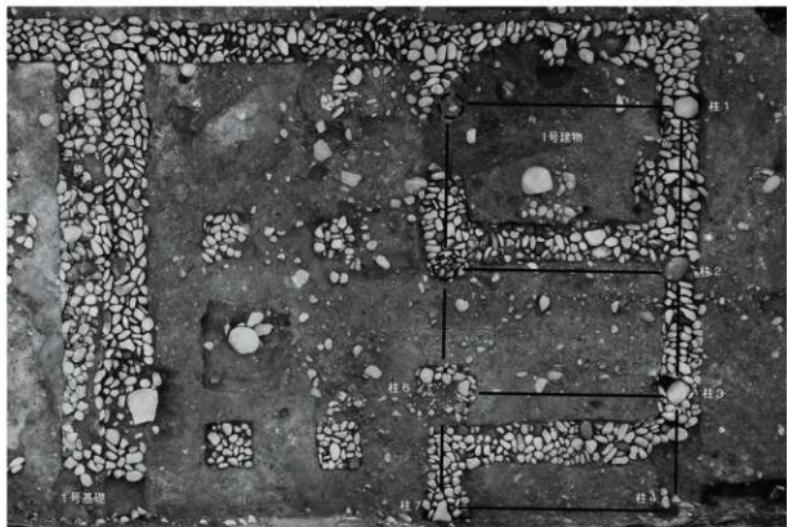


6. 1号柱列柱1完掘（南から）

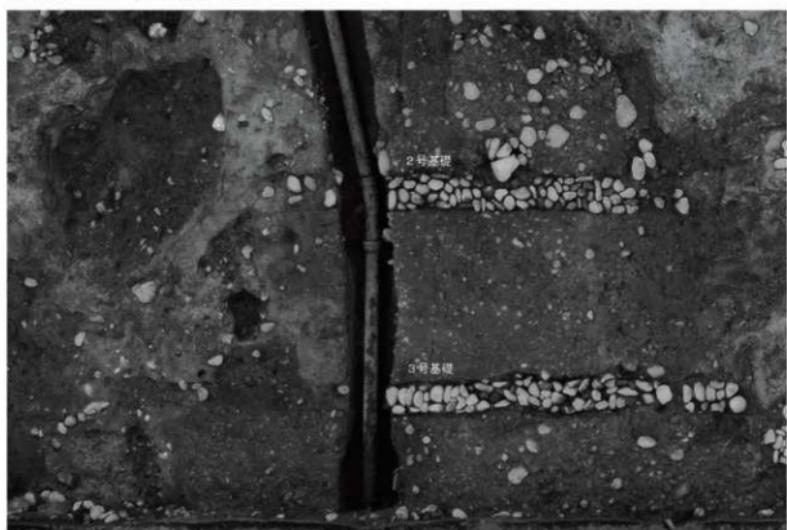


7. 1号柱列柱3検出（東から）

図42 武家屋敷地区第18地点調査状況7

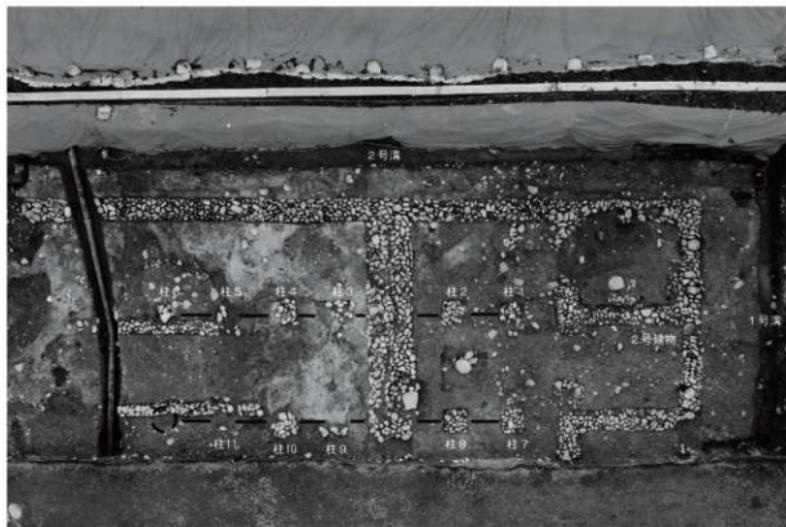


1. 1号建物柱列・1号基礎検出（右が北）



2. 2号基礎・3号基礎検出（右が北）

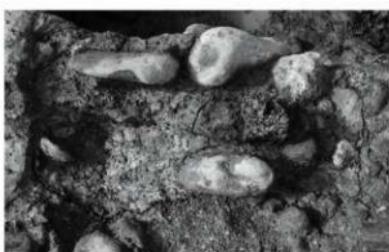
図43 武家屋敷地区第18地点調査状況 8



1. 2号建物・1号溝・2号溝(右が北)



2. 2号柱列・3号柱列検出状況(北から)



3. 2号柱列柱1検出(東から)



4. 2号柱列柱1土層断面(東から)

図44 武家屋敷地区第18地点調査状況9



1. 2号柱列柱2検出（東から）



2. 2号柱列柱2土層断面（東から）



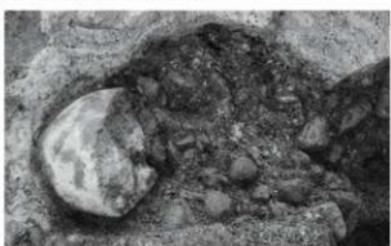
3. 2号柱列柱3検出（東から）



4. 2号柱列柱3土層断面（東から）



5. 2号柱列柱4土層断面（北から）



6. 3号柱列柱1完掘（北から）



7. 3号柱列柱2土層断面（北から）



8. 2号建物柱6検出（北から）

図45 武家屋敷地区第18地点調査状況10

10. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第19地点（BK19）発掘調査報告

（1）調査の経過

本工事は、2021（令和3）年2月13日の福島県沖地震により崩落した擁壁を復旧するものである。この工事では、崩落した擁壁をそのままに積み直し等で復元するのではなく、崩落部分に新たにコンクリート擁壁を設置し復旧することになった。この新たなコンクリート擁壁の設置にあたっては、労働安全衛生規則で定められた60度以下の勾配にて掘削を行う必要があるため、既存擁壁設置時に掘削がなされている範囲よりも東側に拡大して掘削することが必要となる。そのため、仙台市教育委員会の指示を受け、事前の発掘調査を行った。

今回の調査区は、既存擁壁の崩落地点を中心とし、その前面部（2区：擁壁下段部）と裏面部（1区：擁壁上段部）を含む範囲となる（図46）。既存擁壁の高さは約7mあるため、法面等を成形しながら調査を行うこととした。調査面積は、1区（上段部）70.8m²、2区（下段部）103.3m²の合計174.1m²となった。

本調査は、11月15日から1区の掘削を開始した。19日からは1区の精査を開始し、12月2日には1区の調査を終了した。その後、擁壁下段の除去と法面形成、擁壁下段前面の現代の表土・盛土の除去が完了した12月13日から2区の調査を開始し、12月17日に調査を完了した。

（2）調査区周辺の概要

本調査地点の約95m北側にて、同じ擁壁が崩落した際の復旧工事に伴い、2003（平成15）年に立会調査を実施している（『年報』21）。その際の調査では、崩落した擁壁と同様に切り石を用いた仙台城本丸Ⅲ期石垣とは積み方が異なり、背面にはモルタルが使用されていたことが判明している。そして、擁壁撤去後の下層から江戸時代の地表面と推定される斜面が確認され、明治時代以降にその斜面に盛土を行ってから擁壁を構築したものと判断されている。今回の崩落地点でも、崩落土砂中にモルタルやレンガ等が混じっている。のことからも、前回の立会調査時の所見で示されているように崩落した擁壁は、明治時代以降のものと推定された。

また、本調査区の西側には、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点（図46、BK4：『年報』13）の調査区が位置する。この地点では、近世の遺構・遺物が多量に確認されている。

（3）調査の概要

① 1区（図47・図49-①）

現代の造成土を撤去したところ、盛土遺構と南北・東西に伸びる溝跡（1号溝・2号溝）を確認した。これらの遺構の精査を行った。また、既存の擁壁は北側と南側で構築方法が異なっていた（図56-3～6）。南側擁壁は裏込めもモルタルで固めているが、北側擁壁は土と瓦礫で充填しただけの構造であった。この度の擁壁崩落は、このような構造の異なる南北の擁壁が接合する地点にあたり、構造上弱かったことによるものと考えられる。

② 2区（図50・図51）

2区では、既存擁壁を撤去した後に、その前面部の掘削を行った。表土除去後すぐに地山面を確認した。場所によっては岩盤となる。擁壁最下部は、ほぼ岩盤に接している。現代の表土・造成土は6層（基本層1～6層）に細分され、地山層は南北壁面の様相から4層（基本層7～10層）に分けられる。遺構は確認できなかった。

（4）検出した遺構

【1号溝】（図49-②）

1区盛土遺構と2号溝の上面で検出した溝である。西側は調査区外に伸びるため、正確な規模は不明である。遺存長1.95m、最大幅0.83mとなり、深さは0.08mと浅い。南北を基準とした軸角度は、西に1412°傾く。埋土下部は砂を含むシルトであるが、最上面は粘性の強い土層で全体的に砂を含む。出土遺物は出土していないが、2

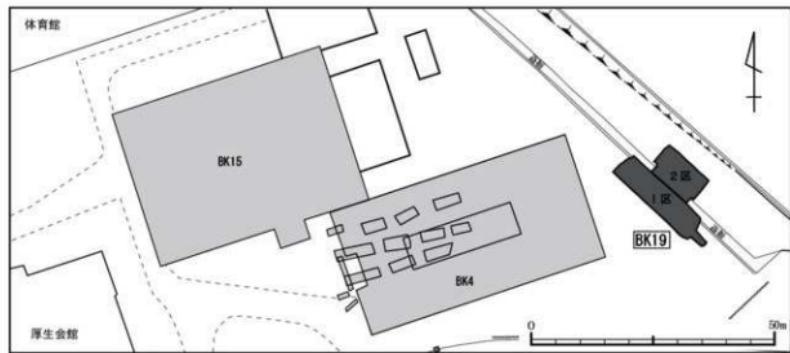


図46 武家屋敷地区第19地点調査区位置図

①造構位置図

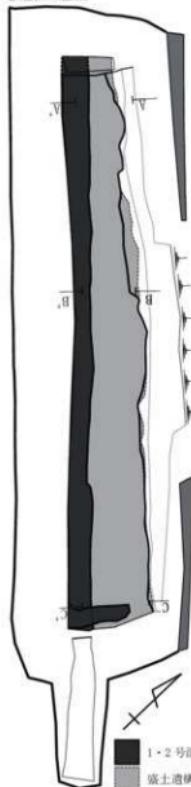
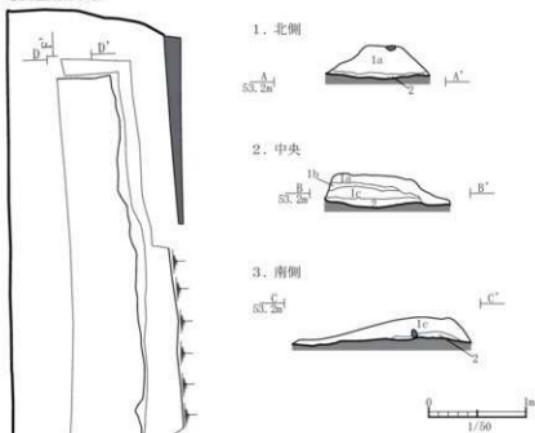


図47 1区平面図

②調査最終状況

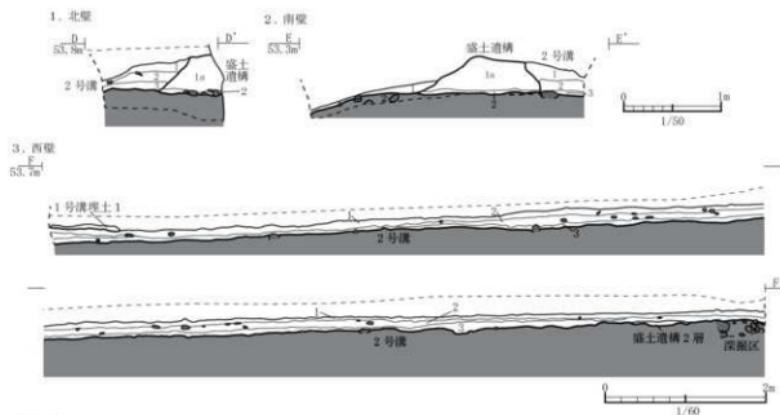


盛土造構

- 1a層 10YR5/8 黄褐色 粘土 粘性弱 しまり強 径1-5cmの繩を少數含む
- 1b層 10YR4/1 黄褐色粘土少數含む
- 1c層 10YR5/8 黄褐色 粘土 粘性弱 しまり強 径1-5cmの繩を少數含む 1a層と同様の層
- 2層 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 地山由來の径1-5cmの繩を含む

図48 盛土造構土層断面図

① 調査区土層断面



基本層

1層 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 しまり中 灰化物・砂を層状に多く含む 盛土道構 1層の崩落土
2層 10YR6/6 明黄褐色砂質 シルト 粘性弱 径1-20cmの円錐を多数含む 地山

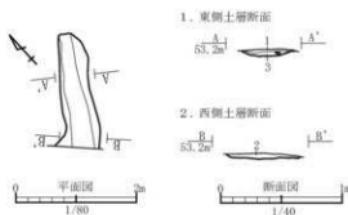
2号溝

1層 10YR5/4 黄褐色 砂 粘性弱 しまり中 ラミナ状に径1-3mmの砂を含む グライ化している

2層 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 径10cm以下の繊をやや多く含む

3層 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまり弱 黒と黄色の粘土ブロックが斑状に混ざる径5cmの繊を含む

② 1号溝



1号溝

1層 2.5YR2/1 黒色 シルト 粘性強 しまり強 径2-6cmの繊を少量含む 1cm以下の灰白色粘土ブロック少量含む 白色微粒子少量含む

2層 5YR7/8 黄褐色 粘土 粘性中 しまり強 砂を全体的に少額含む 径3-5cmの繊を少量含む 1cm以下の灰白色粘土ブロック少額含む 1cm以下の黒色粘土ブロック少額含む

3層 2.5YR5/1 黄灰色 シルト 粘性なし しまり強 径1cm以下の繊を少量含む 白色微粒子少量含む

③ 2号溝

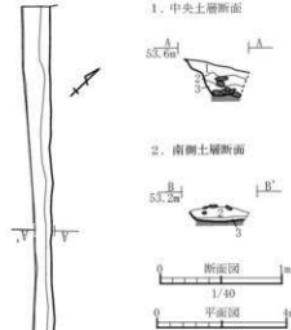
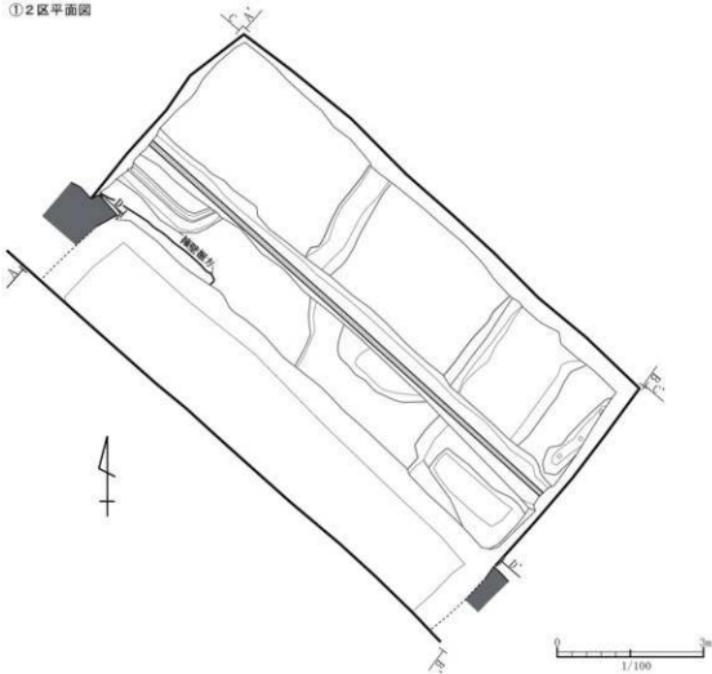
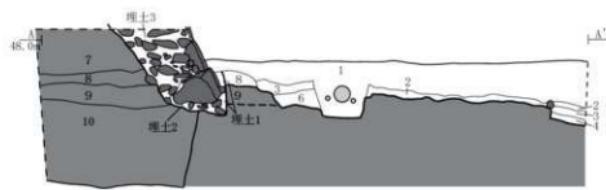


図49 1区土層断面図と1・2号溝

① 2区平面图



② 北壁土层



③ 南壁土层

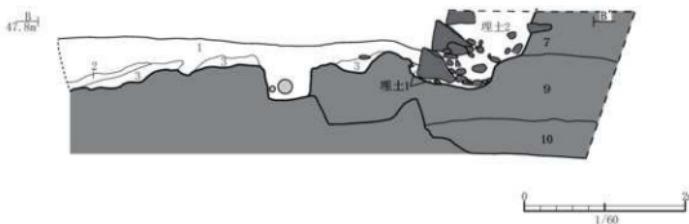
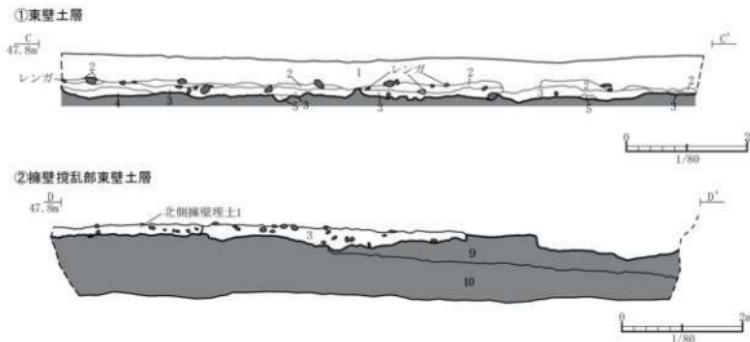


图50 2区平面图·土层断面图



基本層

- 1層 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 木片や径5-10cmの円礫、山砂ブロックなどを含む
- 2層 2.5YR3/2 黒褐色 粘土 粘性中 しまり強 部分的に地山由来の明黄褐色土を層状に含む レンガ片・瓦片・炭化物・径2-5cmの円礫を含む
- 3層 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり強 径1cm-大頭大の円礫を含む 黄褐色土をわずかに含む
- 4層 10YR3/1 黑褐色 シルト質粘土 粘性中 しまり中 部分的に1cmの炭化物を多量に含む 鉄分を部分的に含む
- 5層 10YR2/4 灰黄褐色 粘土 粘性強 しまり中 径2-3cmの円礫を含む 黄褐色粘土を含む
- 6層 7.5YR7/8 黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまり強 径2-10cmの円礫を含む 黄褐色粘土を少量含む
- 7層 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり中を主体とし、明黄褐色粘土や径2-10cmの円礫を多量に含む
- 8層 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 しまり中 径2-3cmの小円礫が密集
- 9層 2.5YR7/6 明黄褐色 砂 粘性なし しまり強 鉄分、径1-2cmの小円礫を多量に含む 径5-10cmの円礫をわずかに含む
- 10層 2.5YR6/6 明黄褐色 シルト 粘性中 しまり強 部分的に鉄分を薄く層状に含む 最下部には、灰色粘土層が構状に入る

北壁埋壁

- 1層 5YR3/4 に赤い黒褐色 砂質シルト 粘性なし しまり弱 径1-5cmの小円礫を多量に含む
- 2層 10YR5/1 黄褐色 粘土 粘性強 しまり中 径2-3cmと径15-20cmの大小の円礫と粘土からなる 部分的に黄褐色土ブロックが入る
- 3層 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中 黄褐色土と褐色土を斑状に含む 黄褐色土は部分的にブロック状に入る 径5-40cm程の大小の円礫を石垣裏込めとする

南側埋壁

- 1層 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性中 しまり中 径3-5cmの円礫をわずかに含む
- 2層 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり中 径2-3cmと径10-40cmの大小の円礫を裏込めとする 部分的に黄褐色土ブロックが入る部分あり

図51 2区土層断面図

号溝より新しいことから、近代以降の遺構と判断した。

【2号溝】(図49-③)

1区西端部で検出した、盛土を掘り込む溝である。南北側と西側は調査区外に伸びており、正確な長さと幅は不明である。調査区内では長さ17.565m、最大幅0.83mとなる。南北を基準とした軸角度は、西に46.9°傾く。深さは0.15~0.25mである。北側端部底面の標高は53.27m、南端部標高は52.75mであり、南側に傾斜している。埋土は3層に分けられる。最上層の1層は、灰白色の緻密な砂層である。2層は、礫を多く含む砂礫層である。3層は黄色粘土と黒褐色砂質土が斑状に混ざる土層である。この3層は、盛土層の土質と類似することから、溝構築時に床面として貼り床されたものと推定される。埋土からは、近代磁器やビール瓶、陶器が出土している。

【盛土遺構】(図47-①・図48)

1区にて検出した。盛土構造の東側は擁壁に破壊され、西側は2号溝が掘り込まれている。南側、北側は調査区外に伸びている。南側端部で盛土上面の標高は53.18mである。盛土は大きく2層に区分できる。1層は黄色粘土と黒褐色砂質シルトを主体とする土層の互層となる。それぞれの土が斑状に混ざる。黄色粘土と黒褐色砂質

シルトの量的な割合から、Ia～Ic層に細分した。2層は、地山上に水平に盛られた黒褐色の砂質シルトである。この盛土下は水平となっており、整地が行われていると考えられる。これらの盛土内からは、近世の遺物が出土しているが、明らかな近代の遺物は含んでいない。このことから、周囲の近世の土層を用いて盛土をしたことが推定される。

(5) 1区・2区から出土した遺物（図52～55、表14～17）

1・2区とも基本層（図53）出土の遺物時期は近代が主体となり、摺絵や銅版転写等の近代磁器（CJ14～20）、土管、ビール瓶、レンガ、板硝子、硬質陶器等が出土している。陶器は、近世と時期比定しても矛盾しない碗や大鉢、土瓶等であるが、いずれも小破片であり、主体となるものではない。

1区2号溝埋土（図52・図54）には、ビール瓶を含み、手書きの近代磁器（CJ1～5）のみで、摺絵や銅版転写の技法は含まれていない。摺絵の技法が主盛期となるのは、明治10年代半ば以降（長佐古2007）であり、それらが含まれないことから、近代でも初期の可能性が高い。陶器は、近世（18世紀以降）の大堀相馬や肥前の碗類（CT1～4）を含むが、小破片が中心となる。軟質施釉陶器の培塿破片（CN1）があり、19世紀代と考えられる。瓦質土器（あるいは土師質土器か）の底部破片（CG1）があり、残存状況はよくないが鉢類と推測した。他に、土師質土器の皿小片、平瓦1類がわずかに出土している。また、珪質頁岩製の洞片（S1・S3）を2点確認している。

盛土遺構1層（図52・図55）出土磁器には植木鉢（CJ1）があり、磁器製植木鉢が増える19世紀代の製品と推測した。特徴的な素描の墨文の碗（CJ7、18世紀後葉～19世紀前葉）、18世紀代と考えられる碗・皿（CJ9・CJ10）がある。CJ8は見込みの菊花文と生掛け製品であることから、17世紀代と推測した。他の磁器は小破片で年代推定が難しいが、中国や瀬戸の磁器はみられず、17世紀後葉から18世紀代の破片と考えられるものが多い。

陶器では、CT5が織部釉流しの菊皿、CT7で志野織部の皿と17世紀前半に遡る瀬戸・美濃製品がみられる。CT10は小破片からの推測であるが、肥前の17世紀代の灰釉皿と考えた。肥前では、17世紀後葉から18世紀前葉の碗や銅錫釉見込蛇の目釉剥ぎの皿の破片がある。ほかは、大堀相馬製品（CT8・CT9・CT11）、小野相馬の小中皿（CT6）と、破片資料も含めて18世紀、あるいは18世紀後半の大堀相馬と小野相馬製品が多い。他に、19世紀代と考えられる東北産の堀跡片や擂鉢破片、大堀相馬の土瓶破片も含む。

土師質土器は、灯明皿（CH1・CH2）に転用されたものを含む皿破片である。ほかに、土師質に似た胎土で、纏維が混入していたとみられる焼成された粘土塊が出土している。竈等の構築材の一部であろうか。軟質施釉陶器は19世紀代の培塿破片のほか、器台（CN2）が出土している。

瓦は丸瓦と平瓦1類の破片である。瓦から直接年代を知ることは難しいが、その特徴は近世瓦に相当する。石製品は正確な用途はわからないが、角形の中に煙管吸口に似た凹みがある形態をしている。他に、縄文あるいは弥生土器の破片が2点出土している（CZ1・CZ2）。

盛土遺構2層（図52・図55）も盛土遺構1層と似たような出土傾向であり、盛土遺構1層より遺物量は少ない。磁器は18世紀代の碗（CJ12・CJ13）で、陶器は19世紀代の東北産擂鉢等が出土するほか、土師質土器皿の破片が含まれる。また、洞片が1点出土している（S3）。

(6) 調査成果

擁壁周辺は近現代に大規模な造成がなされており、明らかな江戸期の遺構面は確認できなかったが、近世の遺物、近代の遺構等を確認することができた。また、1区で確認した盛土遺構や溝の性格は不明ではあるが、19世紀代に何らかの整地作業がなされていることは指摘できる。



图52 武家屋敷地区第19地点出土遗物



图53 武家屋敷地区第19地点1层出土遗物

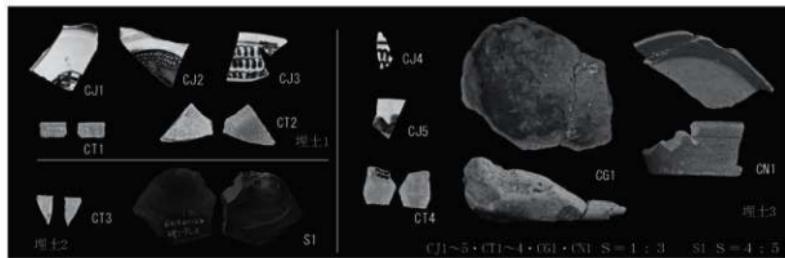


図54 武家屋敷地区第19地点1区2号溝出土遺物



图55 武家屋敷地区第19地点1区盛土遗构出土遗物

表14 武家屋敷地区第19地点出土遺物集計表

出土場所	磁器			土師質 土器	軟質施 釉陶器	瓦	その他	近代遺物	計	
	近代	計	近世							
1層	【焼締】 瓢 1 【他】 小中瓶 8	9	小中瓶 1 瓶 1	3	碗 1 上瓶 1 壺類 1	3			土管 1 ビール瓶 1 煉瓦 1	
盛土 1層			碗 16 小中瓶 2 肩口 1 瓶類 1 壺類 2 袋物 2 袋物 1 植木鉢 1 紅里 1 不明 5	30	中瓶 4 大鉢 1 土瓶 2 壺類 2 壺類 1 小中瓶 6 瓶 8 壺類 3 不明 7	33	皿 9 灯明 3	12 培塿 4 器台 1	5 丸瓦 1 平瓦 1 1類 2	3 石製品 不明 1 粘土塊 1 繩文弥生 土器小片 2
1区	盛土 2層		碗 3	3	碗 3 清鉢 1 鉢類 1 土瓶 1	6	皿 1	1	調片石器 1 不明瓦質土 器 1	
2号溝	埋土 1層	【他】 瓶類 1 小中瓶 14	15		中瓶 1 不明 4	2	皿 3	7	平瓦 1 1類 1	
	埋土 2層				碗 1	1			調片石器 1	
	埋土 3層	【他】 瓢 1 小中瓶 1	2	碗 1	1	皿 1	1	培塿 1	瓦質土器 鉢類 1	
2区	1層	【焼締】 瓢 3 壺 1、小中瓶 1 瓶類 2、鉢類 1 【銅版軸身】 碗 1、小中瓶 1 瓶類 1、鉢類 1 【他】 湯呑 3、 硝子 1、瓶類 1 小中瓶 5、碗 6	28	碗 1 壺類 1 大鉢 1 不明 1	4			不明 1	1	
									【硬質陶器】 碗 2 不明 2 板硝子 1 飲料瓶 1 煉瓦 1	
									7	

表15 武家屋敷地区第19地点 1区 2号溝出土遺物観察表

登録番号	出土場所	材質	器種	法皇	文様	胎土	生産地	製作年代	國
CJ1	1区 2号溝	埋土 1層	磁器	小中瓶	—	見込手描文様あり	密	瀬戸美濃	近代
CJ2				小中瓶	—	見込印文	密	瀬戸美濃	近代
CJ3				小中瓶	—	手描き唐草文	密	瀬戸美濃	近代
CT1		陶器	碗	—	内外面灰釉	やや粗	大根相馬	18c	54
CT2			碗	—	内外面灰釉	やや粗	肥前	17c後半～ 18c前葉	54
CT3		理土 2層	陶器	碗	—	内外面灰釉	普通	大根相馬	18c
SI			石器	調片石器 幅187cm 高20cm	石材：珪質頁岩			繩文 弥生時代	54
CJ4		理土 3層	磁器	小中瓶	—	手描き唐草文	密	瀬戸美濃	近代
CJ5				碗	—	手描き文様あり	普通	肥前?	近代
CT4			陶器	碗	—	内外面灰釉	普通	肥前	17c後半～ 18c前葉
CG1		瓦質土器	鉢類	—	瓦質土器としては焼成が甘い、 底部付近のみ残存			近世	54
CN1		軟質施釉	培塿	底径 11.9cm	底径 約1/5残存			19c代	54

表15 武家屋敷地区第19地点1区2号溝出土遺物観察表

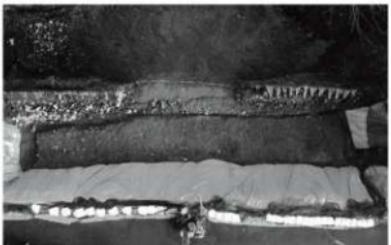
登録番号	出土場所	材質	器種	法量	文様	胎土	生産地	製作年代	団
CJ14	1区 1層	磁器	小碗	口径7.6cm	雪輪海浜風景文	普通	肥前	19世前半	53
CJ15			小中皿	-	見込山水草花文	密	瀬戸・美濃	19世以降	53
CJ16			小中皿	-	手描き唐草文	密	瀬戸・美濃	近代	53
CJ17	2区 1層	磁器	碗	底径4.2cm	摺絵 見込輪花文	密	瀬戸・美濃	明治初頭～前葉	53
CJ18			蓋	-	摺絵 桜唐草文	密	瀬戸・美濃	明治初頭～前葉	53
CJ19			瓶類	底径5.5cm	摺絵 風凰文	密	瀬戸・美濃	明治初頭～前葉	53
CJ20			小中皿	-	銅板転写 花鳥文	密	瀬戸・美濃	明治初頭～前葉	53

表16 武家屋敷地区第19地点1区盛土出土遺物観察表

登録番号	出土場所	材質	器種	法量	文様	胎土	生産地	製作年代	団
CJ6	磁器		猪口	底径4.5cm		密	肥前	近世	55
CJ7			碗	-	唇文	普通	肥前	18世後葉～19世前葉	55
CJ8			碗	底径6.8cm	見込菊花文 生掛け	普通	肥前	17世代	55
CJ9			碗	-	梅枝文	普通	肥前	18世	55
CJ10			小中皿	-	文様あり	普通	肥前	18世	55
CJ11			植木鉢	底径12.0cm	白磁	普通	肥前	19世代	55
CT5	陶器		小中皿	-	灰釉 菊葉 職部転流し？	やや粗	瀬戸・美濃	17世前半	55
CT6			小中皿	口径23.6cm	灰釉 鉄釉流し掛け	やや粗	小野相馬	18世	55
CT7			小中皿	-	長石釉 耳鉢 志野模様 裂織	やや粗	瀬戸・美濃	17世前葉	55
CT8			小中碗	-	内面灰釉 外面部灰釉鉄釉掛分け	普通	大隅相馬	18世後半	55
CT9			小中碗	口径12.1cm	内面灰釉 外面部灰釉鉄釉掛分け	普通	大隅相馬	18世後半	55
CT10			小中皿	-	灰釉	やや粗	肥前？	17世代？	55
CT11			碗	底径4.2cm	内外面灰釉	普通	大隅相馬	18世	55
CH1	土師質 土器		皿	口径10.9cm	口縁の約1/9残存 口縁部の一部にスス付着			近世	55
CH2			皿	口径13.1cm	口縁の約1/7残存 口縁部全体に厚みのあるスス付着			近世	55
CN2			軟質施釉	器台	底径2.8cm	ロクロ成形		近世	55
CZ1			土器	繩文弥生 土器	厚さ0.6cm	LR縞文 内面軽いミガキ		繩文・弥生	55
CZ2	石製品		繩文弥生 土器	厚さ0.5cm	繩文痕跡が確認できる程度に器面の摩滅著しい 内面軽いミガキか			繩文・弥生	55
S2			鋸型？	幅2.5cm 高さ1.6cm	キセルの雁首に似た凹みがある			近世？	55
CJ12			碗	-	文様あり	普通	肥前	18世	55
CJ13	1区 盛土 2層	陶器	碗	-	文様あり	普通	肥前	18世	55
CT12			搖鉢	-	内外面鉄釉	やや粗	東北産	19世	55
S3	石器		剥片	幅3.12cm 横2.75cm	石材：珪質頁岩			繩文・弥生	55



1. 1区調査区遠景（右上が北）



2. 1区調査終了状況（左が北）



3. 1区北側擁壁全景（南西から）



4. 1区北側擁壁断面（南から）



5. 1区南側擁壁全景（北西から）



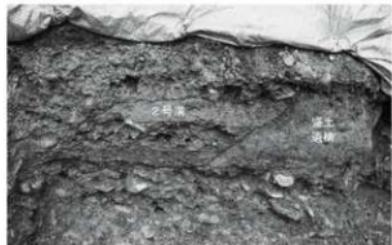
6. 1区南側擁壁断面（北から）



7. 1区造構確認状況（南から）



図56 武家屋敷地区第19地点調査状況 1



1. 1区北壁土層断面（北から）



2. 1区南壁土層断面（北から）



3. 1区1号溝検出（南から）



4. 1区1号溝東側土層断面（東から）



5. 1区1号溝完掘（南から）



6. 1区2号溝南端土層断面（北から）



7. 1区2号溝掘状況（南から）



図57 武家屋敷地区第19地点調査状況2



1. 1区2号溝中央土層断面（北から）



2. 1区盛土造構北側土層断面（北から）



3. 1区盛土造構中央土層断面（南から）



4. 1区盛土造構南側土層断面（北から）



5. 2区調査終了状況遠景（右が北）



6. 2区調査終了状況（右が北）



7. 2区北側擁壁土層断面（南から）



8. 2区南側擁壁土層断面（北から）

図58 武家屋敷地区第19地点調査状況3

11. 2021年度姥沢遺跡発掘調査の概要

(1) これまでの調査要項

2019年度

遺跡名称：姥沢遺跡（宮城県村田町沼田字姥沢28・77・80番地）

調査原因：学術調査

調査主体：東北大学大学院文学研究科考古学研究室

調査協力：東北大学埋蔵文化財調査室

調査担当：鹿又喜隆（東北大学大学院文学研究科考古学研究室准教授）

菅野智則（東北大学埋蔵文化財調査室特任准教授）

調査協力：村田町歴史みらい館

調査期間：2019年10月28日～11月3日

調査面積：18.82m²

調査参加者：柴田恵子（埋蔵文化財調査室専門職員）、洪 恵媛（文学研究科助教）

青木祐、館内魁生、王 晴、橋本洋一郎（大学院文学研究科大学院生）

崔 笑宇、郭 听怡（文学部研究生）

青木飛楠子、瀧谷侑奈、傍島健太、田中 遼、望月美紅、谷津愛奈、吉田 大、渡邊彩佳、三浦 紘、森川颯太（文学部学生）

2020年度

遺跡名称：姥沢遺跡（宮城県村田町沼田字姥沢80番地）

調査原因：学術調査

調査主体：東北大学大学院文学研究科考古学研究室

調査協力：東北大学埋蔵文化財調査室

調査担当：鹿又喜隆（東北大学大学院文学研究科考古学研究室教授）

菅野智則（東北大学埋蔵文化財調査室特任准教授）

調査協力：村田町歴史みらい館、佐野勝宏（東北大学東北アジア研究センター教授）

調査期間：2020年10月25日～11月7日

調査面積：40.99m²

調査参加者：柴田恵子、石橋 宏（埋蔵文化財調査室専門職員）、洪 恵媛（文学研究科助教）

館内魁生、グレコ ジエルマナ、橋本洋一郎、郭 听怡、崔 笑宇（大学院文学研究科大学院生）

金 彦中（文学部研究生）

熊本奈美、岩間結子、神山陽祐、佐藤みなみ、住田 将、三浦 紘、森谷 亮、大橋 葵、木村隆也、車田菜由、後藤 真、佐原珠季、曾原暁花、張 嘉伊、梨本龍成、矢代真魁、結城 駿

2021年度

遺跡名称：姥沢遺跡（宮城県村田町沼田字姥沢80番地）

調査原因：学術調査

調査主体：東北大学大学院文学研究科考古学研究室、東北大学埋蔵文化財調査室

調査担当：鹿又喜隆（東北大学大学院文学研究科考古学研究室教授）

菅野智則（東北大学埋蔵文化財調査室特任准教授）

調査協力：村田町歴史みらい館

佐藤源之（東北大学東北アジア研究センター教授）、齋藤龍真（同 学術研究員）

調査期間：2021年3月20日～3月31日

調査面積：21.14m²

調査参加者：崔 笑宇、濱谷侑奈、傍島健太、金 彦中（大学院文学研究科大学院生）

三浦 紘、後藤 祐、結城 駿、楠 裕人、佐々木晴、柴田紘佑、菅原わかば、高橋 蒼、長岡彩幸、西野裕貴（文学部学生）

*所属、職名はその当時のものである。

（2）調査の目的

村田町姥沢遺跡（図59、表18・19）は、これまでに地元の方により表面採集されてきた資料から、縄文時代の早期・中期・後期から、弥生時代にまたがる重層的な遺跡であると考えられる。とくに縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての遺物が多く、地形・立地からは竪穴住居跡等の遺構の存在も想定できる。本調査では、この姥沢遺跡の発掘調査を通じ、縄文時代中期から後期にかけての居住形態の実態について研究することを目的としている。また、先述の連携協定に基づき、この研究活動を通じた文化財活用の実践を目指している。

姥沢遺跡が位置する村田町周辺地域において、縄文集落遺跡の発掘調査事例は少ない。村田町より南部の蔵王町・白石市における当該期の集落遺跡（菅生田遺跡：丹羽ほか1982、二屋敷遺跡：加藤ほか1984）の発掘調査事例からは、往々にして関東や北陸系の土器が混ざり、敷石住居跡等の関東・中部地域の特徴が混在する様相が見受けられる。この様な状況を踏まえると、本調査成果は、宮城県南部と遠隔地との地域間交流を考える上で、さらに重要な知見を得られるものと考えられる。

この姥沢遺跡の調査は、2019年度に本学文学研究科考古学研究室を主体とし、当室が協力した上で発掘調査を行った。2020年度も同様に実施している。正式な遺跡発掘調査報告書は、これから学術的研究を経てから刊行する予定ではあるが、2019・2020年度の概要については宮城県考古学会宮城県遺跡調査成果資料集にて報告している（東北大大学院文学研究科考古学研究室・東北大埋蔵文化財調査室2020）。

（3）これまでの調査と調査区の設定

2019年度は、竪穴住居跡等の遺構や遺物包含層を探索するための確認調査を実施した。そのため、調査対象範囲全域に1～6区の調査区を設定した（図60）。この調査により、2・6区において遺物包含層等の存在を確認することができた。

2020年度は、その2地点について、さらに内容を確認すべく調査範囲を広げ、調査を実施した（図61）。この調査の際にはグリッドを設定した。2区周辺はK・L-5～7区、6区周辺はG・H-20区となる。K・L-5～7区では縄文時代中期後半の遺物包含層と時期不明の土坑、G・H-20区では縄文時代後期前半期の遺物包含層等を確認した。また、この区周辺では、西側の沢方面に土層が傾斜していくことが明瞭に捉えることができた。

これらの調査成果を踏まえ、2021年度は遺物包含層の端部を捉えるため、東側へ調査範囲を広げ、H・I-20区設定し調査を行った（図61）。さらに、東北大東北アジア研究センターによる「最新科学による遺跡調査ユニット」（代表：佐藤源之）の活動としてGPR（地中レーダー探査）を行って頂き、その成果に基づいてさらに東のJ20区へと拡張した。

（4）調査の概要

①基本層序

本調査区における堆積層は、表土・盛土の1層、遺物包含層の2層、遺物を含む黒色土層の3層、その下にある黒褐色土層の4層が確認できた。各層は、それぞれの土質から細分を行っている。とくに、2層は2a～2e層の5



図59 姥沢遺跡周辺の遺跡

*グレーは雑文の道路を示す。

表18 鮎沢遺跡周辺の遺跡（1）

番号	県番号	遺跡名	市町村	種別	時代
1	7052	鮎沢遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生
2	7041	上ヶ沢遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古代
3	7036	北沢遺跡	村田町	散布地	弥生・古代
4	7086	北沢塚	村田町	塚	中世・近世？
5	7090	福荷遺跡	村田町	散布地	弥生・平安
6	7185	上ヶ沢A遺跡	村田町	散布地	縄文・奈良
7	7186	上ヶ沢B遺跡	村田町	散布地	奈良
8	7087	上ヶ沢福荷古墳	村田町	円墳	古墳後
9	7039	針生A古墳	村田町	円墳	古墳後
10	7004	針生古墳	村田町	前方後円墳	古墳中
11	7097	南小谷遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古代
12	7100	金原古墳群	村田町	方墳・円墳	古墳
13	7088	方領椎現古墳	村田町	円墳・前方後円墳	古墳中
14	7045	薄木城跡	村田町	城館	中世
15	7096	北成生遺跡	村田町	散布地	弥生
16	7099	八掛屋敷跡	村田町	屋敷	中世？
17	7135	新田中遺跡	村田町	散布地	奈良・平安
18	7095	今立遺跡	村田町	散布地	弥生
19	7094	四郎畠遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古代
20	7068	武久市遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生
21	7152	月藏寺跡	村田町	寺院	中近世
22	7134	五石森遺跡	村田町	散布地	奈良・平安
23	7018	宮ノ下遺跡	村田町	散布地	弥生・古墳・奈良
24	7102	坂下古墳	村田町	散布地・円墳・方墳	弥生・古墳中
25	7005	戸木遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古代
26	7063	歳木古墳群	村田町	円墳	古墳
27	7058	鍵倉遺跡	村田町	散布地	古代
27	7058	鍵倉遺跡	村田町	散布地	古代
28	7067	経塙	村田町	絆塙	中世
29	7057	峰崎遺跡	村田町	散布地	古墳・古代
30	7136	新峰崎遺跡	村田町	祭祀遺跡	古墳中
31	7064	蛇口古墳	村田町	円墳	古墳
32	7007	竜泉院横穴墓群	村田町	横穴墓群	古墳後
33	7006	愛宕山古墳・附薬師堂古墳	村田町	前方後円墳	古墳前
34	7061	雉子尾遺跡	村田町	散布地	古代
35	7060	信太田遺跡	村田町	散布地	古代
36	7093	石橋遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生
37	7066	雲南塙現古墳	村田町	円墳	古墳
38	7059	塔ヶ崎遺跡	村田町	散布地	古代
39	7049	閑場城跡	村田町	城館	室町
40	7120	大室沢遺跡	村田町	散布地	縄文・古代
41	7116	下清水遺跡	村田町	散布地	古代
42	7118	大室遺跡	村田町	散布地	縄文
43	7119	笠の内遺跡	村田町	散布地	縄文・古代
44	7117	下清水横穴墓群	村田町	横穴墓群	古墳後
45	7158	割石A遺跡	村田町	散布地	縄文
46	7159	割石B遺跡	村田町	散布地	縄文
47	7051	鴻巣遺跡	村田町	散布地	縄文中・弥生
48	7101	頬城山遺跡	村田町	散布地	縄文
49	7054	深沢遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古代
50	7137	深沢山遺跡	村田町	散布地	縄文
51	7065	法領椎現古墳	村田町	方墳	古墳
52	7011	沼田鶏椎現遺跡	村田町	散布地	縄文中・後・弥生・古墳中
53	7053	見世前遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古墳
54	7114	二斗内B遺跡	村田町	散布地	古代
55	7115	稗柄遺跡	村田町	散布地	古代
56	7112	元坪古墳	村田町	円墳	古墳後
57	7092	元坪遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生
58	7111	元坪横穴墓群	村田町	横穴墓群	古墳後
59	7110	蛇沢遺跡	村田町	散布地	古代
60	7009	盛田遺跡	村田町	散布地	縄文中・後・弥生・古墳・奈良
61	7113	二斗内A遺跡	村田町	散布地	縄文
62	7109	愛宕山船跡	村田町	城館	中世
63	7091	竹ノ内遺跡	村田町	散布地	縄文中・弥生
129	5191	宮ヶ内上遺跡	藏王町	製鉄	近世
130	5038	塙沢北遺跡	藏王町	集落・散布地	弥生中・後・古墳中・後・飛鳥・平安

表19 姥沢遺跡周辺の遺跡（2）

番号	県番号	遺跡名	市町村	種別	時代
131	5009	台遺跡	藏王町	集落・散布地・水田	弥生中・古墳中・後・平安・中世・近世
132	5035	中原敷古墳	藏王町	円墳	古墳
133	5040	大山遺跡	藏王町	集落・散布地	縄文早・弥生中・古墳前
134	6051	橋本A遺跡	大河原町	散布地	古代
65	7055	高木遺跡	村田町	散布地	縄文・弥生・古代
66	6001	小林遺跡	大河原町	散布地	縄文早・中・晚
67	6064	瀬ノ鳥遺跡	大河原町	散布地	縄文・古代
68	6031	五輪遺跡	大河原町	散布地	縄文・弥生・古代
69	6038	小山田遺跡	大河原町	散布地	縄文後
70	6071	松山遺跡	大河原町	散布地	古代
71	6070	久我遺跡	大河原町	散布地	縄文・古代
72	6033	福田古塚	大河原町	塚	鎌倉
73	6069	宮下遺跡	大河原町	散布地	古代
74	6072	山崎遺跡	大河原町	散布地	古代
75	6059	堀内遺跡	大河原町	散布地	古代
76	6073	中添遺跡	大河原町	散布地	古代？
77	6021	山下横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳・古代
78	7027	日向前遺跡	村田町	散布地	縄文・古代
79	6006	打越横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
80	6046	打越遺跡	大河原町	散布地	縄文後・弥生・古代
81	6037	福田館跡	大河原町	城館	中世
82	6068	大在家遺跡	大河原町	散布地	古代
83	6022	葛屋敷横穴墓群	大河原町	横穴墓群	平安
84	6018	山ノ神遺跡	大河原町	散布地	古墳・古代
85	6058	沼遺跡	大河原町	散布地	古代
86	6019	井戸山遺跡	大河原町	散布地	古墳・古代
87	6074	袖谷地遺跡	大河原町	散布地	縄文
88	6075	新屋敷遺跡	大河原町	散布地	古代
89	6004	中山遺跡	大河原町	散布地	縄文後
90	6016	小山田館跡	大河原町	城館・散布地	室町
91	7008	中山横穴墓群	村田町	横穴墓群	古墳後
92	6017	天神山遺跡	大河原町	散布地	古墳・古代
93	6063	矢作遺跡	大河原町	散布地	古代
94	6053	中宿遺跡	大河原町	散布地	古代
95	6066	竹ノ内遺跡	大河原町	散布地	古代
96	6054	二ツ堂遺跡	大河原町	散布地	古代
97	6052	新竹ノ内遺跡	大河原町	散布地	古代
98	6061	三峰山遺跡	大河原町	散布地	古墳・古代
99	6080	三峰山横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
100	6076	姥宮遺跡	大河原町	散布地	古代
101	6062	人山遺跡	大河原町	散布地	縄文・古代
102	6028	堤北遺跡	大河原町	散布地	縄文後
103	6029	洞秀山遺跡	大河原町	散布地	古代？
104	6030	洞秀山横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
105	6014	坂下横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
106	6050	坂下遺跡	大河原町	散布地	古代
107	6077	馬取山遺跡	大河原町	散布地	古代
108	6035	和泉横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
109	6013	妻輪横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
110	6067	妻師遺跡	大河原町	散布地	古代
111	6065	本所敷B遺跡	大河原町	散布地	古代
112	6049	本居敷遺跡	大河原町	散布地	古代
113	6056	新屋敷横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
114	6079	五瀬B遺跡	大河原町	散布地	縄文後
115	6027	大井戸遺跡	大河原町	散布地	古代
116	6045	大井戸横穴墓群	大河原町	横穴墓群	古墳後
117	6026	中遺跡	大河原町	散布地	縄文後
118	7180	夕向原古墳群1号墳	村田町	前方後円墳・散布地	弥生・古墳
119	7181	夕向原古墳群2号墳	村田町	円墳	古墳
120	7149	古峯神社古墳	村田町	前方後円墳・散布地	古墳
121	5012	愛宕山遺跡	藏王町	集落・散布地	弥生中・後・古墳前・中・古代
122	5042	赤皇上遺跡	藏王町	集落・散布地	弥生中・後・平安・中世
123	5044	大橋遺跡	藏王町	集落・散布地	縄文後・弥生中・後・古墳前・平安
124	5043	屏木戸内遺跡	藏王町	散布地	弥生中・古代
125	5013	立石場遺跡	藏王町	集落・散布地	縄文早・前・弥生中・後・古墳前・中
126	5171	中沢B遺跡	藏王町	散布地	弥生中・古墳・古代
127	5045	中沢遺跡	藏王町	集落・散布地	縄文早・弥生中・後・古墳中・後・古代・中世
128	5041	伊原沢下遺跡	藏王町	集落・散布地	古墳前・中・中世

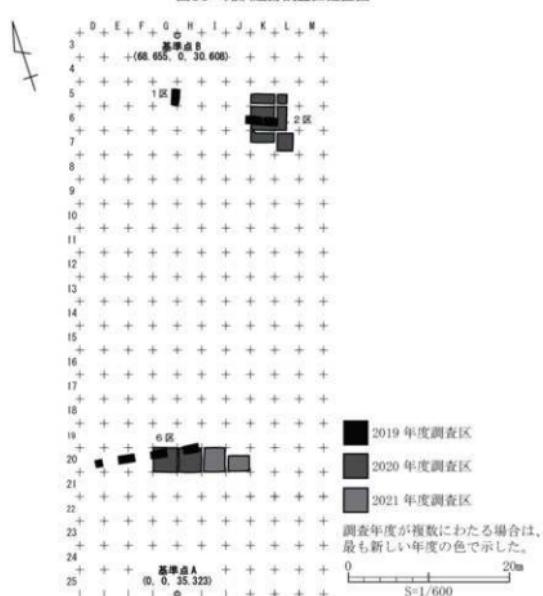
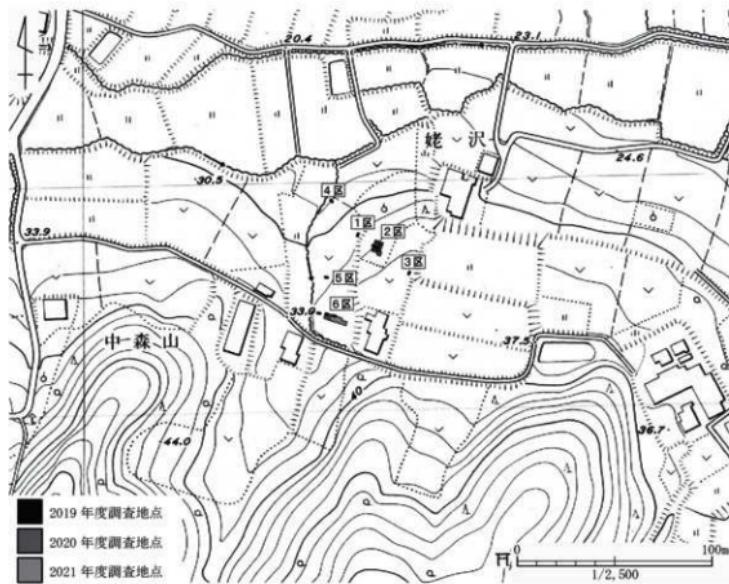


図61 2020・2021年度調査区グリッド配置図

枚に細分した。地山面は確認できていない。なお、4層は部分的な確認のみであるので、3層に含まれる土層である可能性もある。

②H20区（8.34m²、図63）

H20区は、2020年度の調査から引き続いて掘り下げを行った。前年度2b層とした遺物包含層の下からは、3層とした黒色土層が広がる。この3層は南西方面に強く傾斜する。調査区南側では、より粘土質となり灰雜物が少ない2c層が部分的に確認できる。また、3層は、黄褐色土を部分的に含む3a層と、そのような土を含まない黒色土の3b層に分けることができる。3b層は北側に部分的に確認でき、3a層は全面に広がる。この3a層は、傾斜下方に向けて黒色が薄くなり、黄褐色部が増える。この黒色土の3層は、自然堆積の旧表土層と考えられる。H20区の調査は、3層を少し掘り下げた時点で終了とした。

遺物は、それぞれの層から出土しているが、大型の破片は少ない。なお、南東隅にて深掘りを行い、層の堆積状況を確認し、3層下に位置する4層を確認した。また、2c層より下部では湧水が著しく、土層の傾斜方向等を踏まると調査区の南側に沢が存在していた可能性が想定できる。

③I20区（7.80m²、図63・64）

I20区は、2021年度に新たに設置した調査区となる。基本的な層位は、西側に隣接するH20区とほぼ同様であるが、2b層はH20区に比べ厚い。南東隅の2b層最下部からは土器1個体が潰れたような状況で出土している（図64-1）。また、土器破片の大きさもH20区より概して大きい。本調査区は、基本的に全面に3層を検出した状況で終了とした。

④J20区（5.00m²、図64）

地中レーダー探査で何らかの存在が確認された区画になる。調査区東側では、表土（1層）直下より2b・2d層を確認し、さらにその下から炭を多量に含む土層（2e層）を確認した。この土層には、遺物も多量に含む。このJ20区で確認された2e層は、遺物包含層の主体部と推定され、その内容について今後確認する必要がある。

（5）現地説明会

2022年3月29日には、村田町教育委員会の協力を受け、現地説明会を実施している。今回は、基本的に町民向けの説明会としたが、25名の参加者があった。

（6）調査のまとめ

今年度の調査では、遺物包含層等の確認を行った。確実な時期は不明であるが、旧表土層が状態良く遺存しており、遺跡の残りの良さが推定できる。また、J20区で炭や遺物を多量に含む遺物包含層を確認することができた。この遺物包含層の東端部を確認するとともに、これらの内容について今後調査していきたい。